

巻 頭 言

東京理科大学創域理工学部

田中 真紀子

筆者は 2022 年 6 月から 2 年間、日本数学会の理事を務めました。実際には、引き継ぎのため 2022 年 3 月から理事の仕事が始まりました。理事にはいくつかの担当理事の仕事があり、筆者は国際交流担当理事として主に東南アジア数学会との交流事業およびアフリカ数理科学研究所との交流事業に携わりました。東南アジア数学会 (Southeast Asian Mathematical Society, 以下 SEAMS) との交流事業での主な仕事は、加藤敏夫フェローに関することです。加藤敏夫フェローについてはご存知の会員も多いと思いますが、東南アジア在住の若手研究者が日本の大学・研究所へ研究滞在をすることを通して、次世代の東南アジアを担う逸材を育成するとともに、日本と東南アジアの交流を促進する事を目的として、SEAMS の協力のもと実施されています。フェローの期間は一年間で、採択人数は一人です。フェローの滞在費などを含む研究奨学金は故加藤敏夫先生の遺贈により創設された一般社団法人日本数学会加藤基金が充てられます。例年、6 月に次年度のフェロー募集が開始され 10 月末に締め切られます。応募者が少ない場合は締切が多少延長されることもあります。その後、選考委員会による選考を経て、12 月頃に採択者が決まります。筆者は、募集要項の確認を含めた SEAMS とのやり取りを担当しました。

アフリカ数理科学研究所 (African Institute for Mathematical Sciences, 以下 AIMS) との交流事業については、2018 年に日本数学会と AIMS との間で取り交わした覚書 (Memorandum of Agreement) に基づく講師派遣に係る仕事になります。AIMS は、アフリカにおける STEM 領域の向上発展のため、大学院修士以上の水準の教育や学術交流を行うことを目的とした研究機関で、現在は、南アフリカ (ケープタウン)、セネガル、ガーナ、カメルーン、ルワンダに拠点があります。各拠点には一年間の数理科学修士コースのプログラムがあり、卒業生はアフリカの学界や産業界などで幅広く活躍しているようです。このプログラムのうちの約三週間の集中講義を毎年一名の会員に担当していただき、渡航費を (上限はありますが) 日本数学会が負担し、現地での食事や宿泊と研究室は AIMS から提供されます。2018 年度は志賀弘典先生が、2019 年度は木村芳文先生が、ともに AIMS ルワンダで集中講義をされました。(お二人の先生方による報告記事が『数学通信』第 23 巻第 4 号、第 24 巻第 4 号にそれぞれ掲載されています。) 筆者が理事に着任した時期は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で講師派遣が中断していたときで、再開を検討するところから始まりました。まず、前任の理事の先生と筆者とで、AIMS 南アフリカの当時のアカデミックディレクターに、先方の状況や講師派遣の可能性についてオンラインで話を聞いたところ、2023 年秋からのコースは対面で実施する予定だということでしたので、2023 年度に講師派遣を再開する方向で進める

ことになりました。AIMS への講師派遣は、アフリカでの数学教育に意欲をお持ちの会員の協力が欠かせませんので、AIMS との交流事業についてより多くの会員に知っていただくため、日本数学会のウェブサイト「AIMS (African Institute for Mathematical Sciences) への講師派遣について」というページを掲載しました。掲載した翌日ぐらいに講師派遣に関心をお持ちの会員の方からの連絡が届き、改めてインターネットメディアの力に感心しました。

2023 年度の派遣講師は東京工業大学の正井秀俊先生にお願いすることになり、正井先生は 11 月末から三週間、AIMS 南アフリカで Verified Computaion について集中講義をされました。『数学通信』第 28 巻第 4 号に滞在記録が掲載されています。日常のことから講義や学生の様子まで詳しく書かれていて、写真も多く、現地の状況を知るのに大いに役立ちました。AIMS 南アフリカの 2023 年秋からのコース (Review courses) の講義リストを見てみると、約 20 ある講義はヨーロッパの講師によるものがほとんどで、純粋数学から応用数学までかなり幅広い内容のものが並んでいます。正井先生の滞在記録の中で、スーダンでの戦争の影響で実際に来るはずの学生の約半数はビザや移動手段の断絶で AIMS まで辿り着けなかった、ということが書かれていました。スーダンでの戦争のことは、国内の報道ではあまり取り上げられていませんが、現実を知り、アフリカ各地の意欲的な学生が高度な教育・研究の機会を得られなかったことに胸が痛みました。

筆者が理事の任期を終える頃には、AIMS との交流事業の運営資金について見通しの明るい議題も出ていました。日本数学会と AIMS は覚書の内容を再確認し、今後の継続的な実施について改めて合意したところです。両者の関係の更なる発展を期待しています。